

- 1 派遣期日 平成28年6月25日(土)
- 2 研修先 学校名(会場名) 千葉大学教育学部附属小学校
所在地 千葉市稲毛区弥生町1-33
<http://www.el.chiba-u.jp>

3 研修内容

研究主題「対話する力を育む外国語活動—理解から内在化へつなぐ—」

(1) 研究について

千葉大学教育学部所属小学校外国語活動研究部では、コミュニケーションへの積極的な態度を育むためには、相手の発話に応じてやり取りできる力「対話する力」を高めることが必要だと考えている。「対話する力」を育むために、資料1の「第二言語習得のプロセス」を基本的な枠組みとして、授業づくりを行っている。インプットされた言葉が、「気づき」「理解」「内在化」「統合」のプロセスを踏むことにより、アウトプットが可能になるというモデルで説明されている。

資料1 第二言語習得のプロセス

Input	外部から音声や視覚によって学習者に届く
気づき (Noticing)	初めて聞いた言葉の存在や、以前聞いたことのある言葉に気づく
理解 (Comprehension)	気づいた言葉とその意味や使い方を仮説として結び付け始めている
内在化 (Intake)	気づかれ、理解されたインプットが学習者により仮説検証され、言語知識の一部になる
統合 (Integration)	学習者の中で対象語彙とその意味や使い方が一致され、言語知識となる
Output	学習者による第二言語の運用

村野井「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」より

研究部では、「理解」から「内在化」へのつながりに焦点を当て、「理解」が十分に進むような「理解可能なインプット(comprehensible input)」の在り方を探っている。「理解可能なインプット」として、児童が理解を想像できるような具体物や英語絵本(動画教材)、音の違いを認識できるようなゲームを用意したり、実際場面とターゲットの英語表現が結びつくような活動を取り入れたりし、児童個々が言語形式・意味・機能を結びつけ「理解」の段階を経た上で、さらに言語体系として定着していけるような授業展開を目指している。教師主導の文法指導を最小限にし、多くの英語音声に触れさせる中で仮説を生成できるように実践している。

(2) 公開授業 5年生

- ① 研究テーマ be 動詞“is”が“was”に変化すると以前の状態を表す英語表現になることを理解させるにはどうしたらよいか

- ② 単元 I Am a Weather Forecaster! ～今日の天気を知らせよう～

③ 指導の手立て

- ・過去の写真と今日の写真を使って、天気の違いと英語表現の違いに気づかせる
- ・今年の日付と天気の組み合わせを使って、聞き分けながら天気記録図をつくる

④ 本時の目標

is と was の発音と意味の違いを理解し、聴き分けながら、各地の天気図を協力して完成させることができる

⑤ 指導過程例

- ・ 前時までを振り返る "Weather Chants"
- ・ be 動詞の過去形に気づく
- ・ be 動詞リスニングエクササイズに取り組む
- ・ 「今日の天気？ 昨日の天気？」 アクティビティに取り組む
- ・ 本時に学習した英語表現をワークシートに書く

(3) 研究協議から（協議の中での反省・助言等を掲載）

- ・ 語彙数について

児童がすでに知っている単語、またはある程度耳慣れた単語の場合は、提示する語彙を増やしていくことが効果的である。本時の場合は様々な天候をあらわす 20 単語程度を提示した。文章としても短い基本表現だったので慣れ親しみがあると考え、上位の児童にとっても満足いく量になった。下位の児童にとっても負担になるものではなかった。

- ・ 「気づき」「理解」から「内在化」

同じ表現で違う活動を次々と取り入れ、ていねいなインプットであった。アウトプット活動を行わずに、1 時間かけてインプットのみに焦点化した授業展開であった。個人差があるからこそ繰り返しが大切になってくる。

- ・ 本時の目標について

他校の本時の目標では、「慣れ親しむ」や「気づく」が多い中で、「できる」という技能面の目標を明記している。「何を学んだのか」を理解し、「学ぶのであれば、何かしら身に残るもの」として児童が実感できるように目標を立てた。教科化に向けて、技能面を重視させた目標を立てていくことがあってもよいのではないかな。

- ・ 文法指導について

文法指導についての詳しい内容は、学習指導要領では明記されていない。限られた時間の中で、早く明確に分かる文法指導はどのようなものなのかを考えていくと、本時の指導では回りくどいように思われる。しかし、表現の機能や使用場面を「仮説」から「理解」にゆっくりとつなげていくことで、より深く自然な場面の中で理解できるのではないかな。この場合の「理解」は算数などの「理解」とは違う。その「理解」が中学校での英語学習に役だっていく。

4 感想

今回の研修では、子供たちが学びを楽しむ授業とは何かということを考えさせられた。授業の中で、「ああ、わかった。」「なるほど。」「楽しかった。」など、児童の学びを楽しむつづやきや喜ぶ姿がたくさん見られた。特に、友達とのかかわり合いの中で生まれる学びには感動の声が上がったり、身をのりだして授業に臨む様子もあった。その場面を作るためには、教師の教材研究や言葉かけなど、授業を構成する様々な要素があることを感じた。

これまでの私自身の外国語活動の授業を振り返ると、児童が自信をもってアウトプットを行うことにばかり目を向けていた。インプットの重要性を再認識し、インプットとして入ってきた表現が、意味や機能として本当に正しいのかを児童自身で確認する場があることで、次の活動への意欲づけになることなど、今後の指導に大いに参考になった。繰り返し基本表現のインプットを行う活動展開や、ALT と HRT の役割分担、グルーピングの工夫、グットカードで褒める場面を作るなど、今回の研修で得たことを実践してみたい。

これからのグローバル社会の中で、学んだことを将来生かすための外国語活動にするためには、まずは何より英語を楽しんで使うことが大切であることが分かった。児童の実態に応じた「楽しい」学びを作っていくことは、学級担任だからこそできることも多いはずである。ALT 任せになりがちな外国語活動から、学級担任の役割を明確にした指導に挑戦していきたい。また、今後の外国語活動の教科化や小学校中学年での実施に向けて、学級担任自身が英語活動を楽しんで学べる模範となって、授業展開に向けて研修に努めていきたい。